



- 2 公募共同研究の実施
Workshops of collaborative research projects held
- 3 五十嵐准教授定年退職・米澤助教退職
Associate Professor Igarashi and Assistant Professor Yonezawa retired this spring
- 4 東南ア研を離れるにあたって
Message from/for members who have recently left CSEAS
- 5 拠点大学交流プログラム 新たな展開
A new phase of Core-University Program begun
- 6 G-COE「生存基盤持続型の発展を目指す
地域研究拠点」第2回国際シンポジウム
The Second International Workshop of Global-COE
Program "Biosphere as a Global Force of Change"
- 7 第3回京都大学東南アジアフォーラム
The Third Kyoto University Southeast Asian Forum "Global
Crisis in Food and Energy: Thailand-Japan Perspectives"
- 第4回京都大学東南アジアフォーラム
The Fourth Kyoto University Southeast Asian Forum
"Water Cycle Management in Indonesia"
- 8 第4回京都大学附置研究所・センターシンポジウム
「京都からの提言」開催
The Fourth Symposium of Kyoto University Institutions
and Centers "Proposal from Kyoto"
- 9 「フィールド・ステーションを活用した先導的地域
研究における若手研究者交流事業」を終えて
Through with the Mutual Exchange of Young Scholars
in Integrated Area Studies by Using the Field Stations
Program
- G-COE ニュース
G-COE News
- 10 GIS-IDEAS, PNC and ECAI Joint International Symposium 2008
"Towards Sustainable and Creative Humanosphere"
- JSPS-NRCT Core University Program
Workshop on Popular Culture Co-productions and
Collaborations in East and Southeast Asia
- 11 基盤研究B・拠点大学事業・G-COE ジョイント国際ワークショップ
「東南・南アジアの労働集約型工業化」
Joint Workshop on Labour-intensive Industrialisation
in South and Southeast Asia
- シンポジウム「土屋健治と『カルティニの風景』」
Symposium on "Prof. Kenji Tsuchiya and His *Landscape of
Kartini*"
- 12 世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業
—南アジア周縁地域の開発と環境保全のための
当事者参加による社会的ソフトウェア研究—
Need-Based Program for Area Studies
Study on "Social Software for Development and
Environment Preservation in Peripheral South Asia:
Trying to Find Clues in Stakeholder Participation"
- ASAFAS 創立10周年記念シンポジウム
「地域研究の新世代と語る」
Symposium in Commemoration of the Tenth
Anniversary of ASAFAS "Get together, a New
Generation of Area Studies"
- <受賞> Award Winner
桜井由躬雄先生ベトナム学賞受賞
Emeritus Professor Yumio Sakurai
- 2009年度科研費リスト
List of new CSEAS Projects supported by Finance
Grants-in-Aid for Scientific Research
- 13
- 14 Colloquia
- 15 人事 Personnel
- 16 Visitors' Views
- 19 <東風南信> Reflections
東南アジア研究の歴史的位置
—中国から見た30年— 濱下武志
"Studies on Southeast Asia in China: Overview of 30
Years History" by Takeshi Hamashita
- 21 <連絡事務所便り> Letters from Liaison Offices
- 22 <私の地域研究論> My "Area Studies"
"Gender Struggles in the Southern Philippines"
by Patricio N. Abinales
- 23 研究会報告
Report on Seminars
- 25 出版ニュース
Publication News
Kyoto CSEAS Series on Asian Studies 刊行
Introducing Kyoto CSEAS Series on Asian Studies
- 26 図書室ニュース
Newly-arrived books at the Library
<訃報> Somboon Siriprachai 先生
Memorial to Prof. Somboon Siriprachai



公募共同研究の実施



◀西代表の研究会の様子 2009年1月19日

従来の所内研究会を拡充発展し、2008年度から公募共同研究プログラムを開始した。企画段階に手間取り、6件のプロジェクトに研究助成金を配分できたのは9月になってからであった。プロジェクトの活動のいくつかを以下に紹介したい。

「アジアにおける大規模自然災害の政治経済的影響に関する基礎的研究」（研究代表者・西芳実・東京大学）では、自然災害への対応において、被災地の事情に通じた地域研究者が果たしうる役割について、災害援助の専門家らとともに検討を重ねた。2008年10月12日には、アジア政経学会全国大会（於神戸学院大学）で共通論題「アジアにおける自然災害と政治経済変動」を企画し、メンバー3人が以下の報告をした。

西芳実「インドネシア・スマトラ沖地震津波——紛争下の人道支援と災害対応」、岡本郁子（アジア経済研究所）「ミャンマー・サイクロン災害——政治化された災害と不信の連鎖」、田中修（財務省財務総合政策研究所）「中国・四川大震災——その政治・経済政策への影響」。それらの報告に対して、牧紀男教授（京都大学）と地主敏樹教授（神戸大学）から、それぞれ「災害・防災の視点から」「神戸震災の経験を踏まえて」と題するコメントと応答をいただいた。

また、2009年1月19日には、稲

盛財団記念館でミニ・シンポジウム「災害対応と地域研究——2008年ミャンマー・サイクロン被害の事例から」を開催し、以下の報告を行った。山本理夏（NPOピースウィンズ・ジャパン）「サイクロン・ナルギス被災者支援——NGOの視点から」、齋藤哲也（JICA 専門家／日本工営株式会社）「ミャンマー国エーヤワディデルタにおけるサイクロン・ナルギスの被害と復興支援」、飯國有佳子（法政大学）「サイクロン被害による人々の生活の変容と支援」。また、お二人のコメンテーター（岡本郁子、藤田幸一）を迎え、質疑応答を行った。

「アジアにおけるインフォーマル経済とグローバル・バリュー・チェーン」（研究代表・遠藤環・埼玉大学）では、2009年3月20～30日の間、メンバーがタイ北部（遠藤環、後藤健太、藤田幸一）および中部（Daonoi Srikajon）において、調査および大学研究機関との打ち合わせ・会議、カウンター・パートとの意見情報交換、さらに今後の展開に備えてのネットワーキングなどを行った。3月28日にはバンコク連絡事務所に集まり、報告会を行った。

「東南アジアにおけるインフォーマルな越境移動からみた地域再編の研究——バンコク連絡事務所を拠点とする日タイ間の若手学術交流を中心に」（研究代表・片岡樹・ASAFAS）

では、2009年3月18日に本研究所バンコク連絡事務所を会場とし、チュラロンコン大学アジア移民研究センター（ARCM）との共催による合同ワークショップ“Informal Human Flows between Thailand and Its Neighboring Countries”を実施した。報告者は日本側3名、タイ側3名の計6名で、参加者総数は18名であった。

ワークショップでは、まず片岡が開会挨拶で本プログラムおよびワークショップの趣旨を説明し、当該研究領域における問題の所在について整理を行った後に、各個別報告を行った。個別報告の内容は、ラオスからタイへの出稼ぎ者を支える諸制度、泰緬国境でビルマ人労働者を支援するNGOの役割、タイ国内ビルマ人労働者家族におけるアイデンティティ形成、タイにおける移民子弟へのオルタナティブ教育、タイ労働者連帯委員会による外国人労働者支援、僧侶によるカンボジア・タイ間の越境移動などである。個別報告終了後にはARCMのスパーン・チャントワニット教授、および速水洋子教授によるコメントを受け総括討論を行った。

「東南アジアの『消滅に瀕する焼畑』に関する文化生態的研究」（横山智・名古屋大学）では、2009年1月7日に本研究所で研究会を開催し、8名の参加者があった。河野泰之が

「コペンハーゲン・焼畑ワークショップの報告」、田中荘太が「サラワクでの焼畑研究」、横山智が「北タイにおける焼畑から常畑への移行」について報告した。東南アジアの島嶼部と大陸部の違いを理解するだけでなく、東南アジアで共通していること、たとえば焼畑陸稲作からパラゴムやアブラヤシのプランテーションへ土地利用が変化していることを参加者間で共有することができた。

さらに、日本人研究者による焼畑研究が欧米諸国でほとんど知られていないことが指摘された。日本人研究者は日本語で論文を発表するケースが多く、欧米の研究者の目に留まらないことが原因である。これを受けて、本公募共同研究では、日本人研究者が実施した焼畑研究（戦後から現在まで）の文献リスト作りを始めた。来年度は、検索したデータを整理し、共同研究者が分担して、日本

人研究者による焼畑研究のレビューを英語で執筆することを予定している。

「アジア農村社会構造の比較研究— 権力統治下の村落形成」（研究代表・藤田幸一）では、研究会を2回実施した。第1回目は東京大学にて11月29日に開催し、大鎌邦雄『行政村の執行体制と集落』（農業総合研究所, 1994）を読み、日本の典型的な「自治村落」の構造的特質、および特に明治政府の推進した部落有林統一政策とそれに対する行政村や集落の対応について、議論を深めた。日本の「自治村落」も、自治村落間にまたがる問題については無力で、上位権力の調停等があつてはじめて問題が解決し、共同体も安定する、などの重要な教訓を得た。

第2回目は鹿児島大学にて2月20、21日の2日間をかけて実施した。初日には坂根嘉弘『分割相続と

農村社会』（九州大学出版会, 1996）を読み、日本の他地域とは異なる鹿児島地方の分割相続制度とそれに関連した特異な家族・村落制度について議論を深めた。鹿児島に見られる制度は、タイなど東南アジアとの類似性がある。また第2日目には、南さつま市の旧加世田に行き、そこで古老の二人を囲んで、鹿児島地方の特異な家族・村落制度について座談会を開催した。座談会では、「門」（かど）と呼ばれる（擬似）親族集団が今でも生きていることが明らかになった。また男子の末子相続が基本であることも明らかになった。座談会の後、実際に古老の家と「門」、および「門」の墓地を実地見学した。初年度は、日本のムラおよびそれとはやや異なる形態を見せる鹿児島の村落について研究を深めた。

（文責・清水 展）

五十嵐忠孝准教授 退職記念最終講義と

五十嵐忠孝准教授・米澤真理子助教

退職記念歓送会が開催される

去る3月26日稲盛財団記念館において本研究所五十嵐忠孝准教授の定年退職記念最終講義が行われ、続いて五十嵐忠孝准教授及び米澤真理子助教の退職記念歓送会が開催された。五十嵐准教授は、1984年4月に東南アジア研究センター（当研究所の前身）助教授に就任されてから25年間、フィールド調査をベースに生態人類学や人口論の研究を精力的に進められた。最終講義では、住民による、鳥や昆虫、星などを用いた農事暦の確定についての研究など、季節の移行を感知し予測する知識と技術として活用されている「在

来暦法」の研究について講義された。また、五十嵐准教授は、長年の間、東南アジア研究所での東南アジア諸語資料の収集に尽力されると共に、当研究所図書室の運営やジャカルタ連絡事務所の運営に貢献された。また、米澤真理子助教は、半世紀ちかくの歴史をもつ季刊学術誌『東南アジア研究』の編集を中心に「東南アジア研究叢書」や「ニューズレター」の刊行、さらには当研究所の研究実績をアーカイブとして蓄積することに尽力された。今日、東南アジア研究所の諸活動が国内外へ情報発信され、国際的にもその地位を確立して

きたのは、米澤助教の多大なご貢献によるものである。

五十嵐准教授、米澤助教のご退職を記念し、これまでのご貢献に感謝する歓送会では、現職の教職員に加えて数多くの先輩諸氏やご両名の旧同僚の方々など、約130名が一同に会することとなり、昔話にも花を咲かせながら、和やかにご両名のご活躍を振り返る機会となった。五十嵐准教授及び米澤助教のこれまでのご尽力とご貢献に感謝するとともに、今後のますますのご活躍を祈念したい。

（文責：柴山 守）





五十嵐忠孝先生は、1984年に東南アジア研究センター（当研究所の前身）助教授に就任、以降25年当研究所に在籍され、2008年度末をもって退職された。五十嵐先生は、1980年代、インドネシア西ジャワ州のスダ村人村などにおける稲作の伝統農法に関する研究や、村民の年齢推計に関する研究において顕著な業績を上げられた。その後、住民

五十嵐先生の在来暦法の研究

による、鳥や昆虫、星などを用いた農事暦の確定の研究など、季節の移行を感知し予測する知識と技術として活用されている「在来暦法」の研究に関心を移され、調査地も、ロンボクやバリに拡大されて精力的な研究を実施されてきた。これらの研究は、住民に対する徹底的な聞き取りと、多数の言語に渡る諸研究文献の長年の蓄積とそれら文献の縦横の利用に基づく、きわめてアカデミックなものである。五十嵐先生は、東南アジア研究所を去るにあたって、2009年3月26日に「在来暦法研究のこれまで——バリ、ロンボク、スンバワの事例から」と題して最終講義を行われた。在

来暦法は自然現象を手がかりに、年初と暦年が決定されるが、暦年上の日付や暦月が実際の月の満ち欠けと合わなくなるので置閏が行われる。五十嵐先生は、この置閏を詳細に説明され、在来暦法のロジック、置閏の操作の実際を語られた。かつてバリの中でも地域ごとに置閏法とその計算方法が異なっていたバリ暦が、バリ単一のこよみとなった際にとられた、近代天文学による朔望予測の利用などによる方法や、そこからくる農漁民の季節感との齟齬などを生き生きと語られ、最終講義参加者はその研究の奥深さに再度感嘆した。

（文責：水野広祐）

ひとこと

私は30年以上にわたり東南アジア研究所に在籍しました。12年余事務室で勤務した後、編集室で季刊誌『東南アジア研究』、ニューズレター、要覧などの出版に携わってきました。

編集室に移った当初は『東南アジア研究』の投稿原稿は手書きが主流でしたが、現在では殆どがメールによる投稿に変わっています。このこと以上に、査読者へメールを通じて依頼できるようになったことは大きな変化でした。編集委員の誰も面識がないが、出来るならばこの論文についての意見を聞きたいという方に、それが海外の方であっても

依頼のメールを送りました。その未知の方から承諾の返事が戻ってきたこと、それは『東南アジア研究』という雑誌が認知されていることの証に他なりません。私はその窓口にしかすぎませんが、その無償の好意に接する度に、最大級の謝意を伝えようと苦手な英語と格闘したものでした。

しかしながら一方で、一日中コンピュータに向かっていないと五感すべてで対応できないことのもどかしさに襲われることが時にありました。これは、東南アジア研究所に属しながらフィールドワークに無縁であった私の戯言ですが、在籍中にいただ

米澤 眞理子

いた皆様からの有言・無言のご叱声と励ましを糧として、これからの毎日をしつかりと刻んでゆければと願っています。

長い間、本当に有り難うございました。



拠点大学交流プログラム

新たな展開

京都大学東南アジア研究所がタイのタマサート大学をカウンターパートとして、1991年度より進めてきた拠点大学交流事業（日本学術振興会 & National Research Council of Thailand）「東アジア地域システムの社会科学研究」は、昨年度3月をもって終了した。最終年度は、共同研究7「東アジアを拓く人達 — 新しい東アジア政治経済・社会・文化モデル構築」、8「変貌する『家族』」、9「アジア国際経済秩序 — 歴史的展望」各共同研究とも成果に向けて主に最終ワークショップにおいて報告と議論を行った。

2008年12月10～11日には共同研究7のメンバーであるオトマズギン・ニシム氏が“Popular Culture Co-productions and Collaborations in East and Southeast Asia”ワークショップを企画し、2日間にわたって映画やアニメをはじめとするポップカルチャーの製作・消費の広域アジア化をテーマに熱心な議論が繰り広げられた。12月20～21日には、

共同研究9が、“Labour-intensive Industrialisation in South and Southeast Asia”（科学研究費「インドにおける労働集約型経済発展と労働・生活の質に関する研究」およびグローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」イニシアティブ1との合同）ワークショップを開催した。この会議に出席された共同研究9のタイ側カウンターパート、ソンプーン・シリプラチャイ氏（タマサート大学経済学部）が、帰国便に乗るため関西空港へ向かう途中で突然逝去された。誰も予想だにできなかった悲しい出来事だった。これには、全所を挙げて対応し、年明けてバンコクでご家族・友人に囲まれてのご葬儀が行われた。

2009年2月23～24日に共同研究7と8合同で最終ワークショップ“The Making of East Asia from both Macro and Micro Perspectives”を開催し、4年間の研究を締めくくり成果に向けた議論を行うと同時

に、現在の世界経済の危機に対して東アジア地域における対応を議論する新しい方向づけも模索された。

本事業では10年間で9つの共同研究を行い、既に3冊が京都大学学術出版会とTrans-Pacific Pressの共同でKyoto Area Studies on Asia叢書として出版され、さらに2冊は京都大学学術出版会とSingapore University Pressとの共同出版が最終準備段階にある。期間終了後となるがさらに5冊の出版準備が進行中である。

今年度より、新たにアジア教育研究拠点事業「グローバル時代における文明共生 — 東南アジア社会発展モデルの構築」が開始する。これまでのタマサート大学に加え、インドネシア科学院と台湾中央研究院アジア太平洋地域研究センターをカウンターパートとするマルチ方式による5年間の交流事業である。

（文責：速水洋子）

【既刊】

1. *After the Crisis: Hegemony, Technocracy and Governance in Southeast Asia*. 2005. Shiraiishi, T. and P. Abinales (eds.)
2. *East Asian Economies and New Regionalism*. 2008. Abe, S. and Bhanuphong Nidhiprapha (eds.)
3. *The Rise of Middle Classes in Southeast Asia*. 2008. Shiraiishi, T. and Pasuk Pongpaichit (eds.)

いずれも Kyoto University Press & Trans-Pacific Press.

【印刷準備中】

1. *Flows and Movements in Southeast Asia*. Ishikawa, N. (ed.)
2. *Populism in Asia*. Mizuno, K. and Pasuk Pongpaichit (eds.)

いずれも Singapore University Press & Kyoto University Press.



グローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」 第2回国際シンポジウム “Biosphere as a Global Force of Change” 開催

グローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の第2回国際シンポジウムが2009年3月9日から11日まで稲盛財団記念館で開催された。1年前に開いた第1回との大きな違いは、2年弱にわたって行ってきたわれわれの研究成果を示すことに重点が移ったことである。しかも多くの報告は本COEの助教・非常勤研究員によるものであった。

新しいパラダイムの中心的概念である「地球圏」「生命圏」「人間圏」それらを総合する「生存圏」は、多くの報告の分析枠組となり、討論でもその有効性如何、あるいはその具体化の方向が大きな話題となった。地域研究の視座を「生産」から「生存」へ、「温帯」から「熱帯」へと本格的に転換するためには、こうした枠組の設定が必要であり、それによって生存基盤持続型の発展が展望できる、というのが、約100名の参加者

へのメッセージだった。問題提起としては肯定的に受け止められたのではないかと思う。

本シンポジウムのタイトル“Biosphere as a Global Force of Change”が示すように、今回は、生存圏の中でも、現代の化石資源に依存する社会でしばしば忘れられがちな「生命圏」が人類社会に与える影響に焦点を定めた。セッション1では、生命圏を支える制度と、生存基盤指数作成の可能性が議論され、セッション2では、地球圏と人間圏を媒介するものとしての生命圏、水・熱循環、都市とその周辺における生物対応性、乾燥地帯の牧畜民にとっての不確実性などのテーマがとりあげられた。セッション3では、バイオエネルギーの利用について技術開発の現状が広い視野から報告されるとともに、15のポスターセッションの要旨が紹介された。セッション4は、エイズ感染者を抱えるアフリ

カの地域社会の対応、地震に対するトルコの都市社会の対応、アフリカの稲作をめぐる生命圏と人間圏の交錯、「連鎖的生命」の概念を軸とする生存基盤の思想を素材として、現代社会においてどのように生命圏の役割を可視化し、生存圏におけるその地位を復権できるかを論じた。

アメリカ、スウェーデン、オランダ、インドからの招待を含む6名の外国人参加者と、4名の日本人招待者には、われわれのパラダイム形成や個別報告に積極的にコメントしていただいた。また、終了後インフォーマルな集まりを持ち、本プログラム全体についても有益なアドバイスをいただいた。さらに、東南アジア・南アジアからの多くの若手研究者の参加を見たことは、本プログラムの長期的な発展にとってまことに意義深いことであった。

(文責：杉原 薫)



【バンコク】

第3回 “Global Crisis in Food and Energy: Thailand-Japan Perspectives”

第3回京都大学東南アジアフォーラム “Global Crisis in Food and Energy: Thailand-Japan Perspectives” が、2009年1月17日、バンコクのインペリアル・クイーンズパーク・ホテルにて開催された。東南アジア研究所は、タイ人京大同窓生組織である Kyoto Union Club とともに、在タイ日本人京大同窓会、泰日工業大学からも協力をえて、フォーラムを主催した。「食糧・エネルギー危機への新しい視角」というテーマは、タイの市井の人々が、いま生活に密着した

問題として高い関心をもつことから選ばれた。当日は、石井米雄本学名誉教授、タイ国日本大使館の小町恭士大使（本学卒業）、吉川潔理事などの来賓のほか、チュラロンコン大学などのタイ人学部学生が多数詰めかけ、準備した220席の9割が埋まった。そして、本学農学部名誉教授の辻井博先生による米を中心とした食糧危機についてのマクロ経済の分析、タイ人同窓生によるエネルギー危機時代の技術開発の紹介、そしてJETRO バンコクセンター所

長の山田宗範氏（本学卒業）によるASEAN および東アジア地域のエネルギー・食糧危機に関する政策協力の現状と課題の各講演が行われた。タイの一般社会に向けて京都大学発の最新の学術成果を発信し、タイにおける京大のプレゼンスを高め、留学先としての京大をタイ人学生にアピールするという本フォーラムの目標は、幅広い参加者を得て十分に達成されたといえる。

（文責：小林 知）

▼辻井京都大学名誉教授（バンコク）



▼右から小町大使、水野所長、石井名誉教授、吉川理事、Wiwut会長（KUC）（バンコク）



▲HAKU 会長スピーアンディ氏（ボゴール）



▲左から津田生存研副所長、ナイク教授（ボゴール農科大学）、バンバンHAKU 事務局長、ワフコ研究員（インドネシア科学院）（ボゴール）

【ボゴール】

第4回 “Water Cycle Management in Indonesia”

2009年1月23～24日、ボゴール農科大学において、インドネシアの京都大学同窓会 HAKU、ボゴール農科大学、本学の共催で第4回京都大学東南アジアフォーラムを開催した。本フォーラムは、本学の最新の研究成果を現地社会に伝えることを目的としている。既にジャカルタで1回、バンコクで2回開催してきた。

第4回フォーラムは、主催校の強い要望によって水資源をめぐるものとなった。インドネシアではかつての広大な熱帯雨林が急速に宅地造成用地やアブラヤシ農園に生まれ変

わってきている。首都ジャカルタではほぼ毎年、雨期に洪水に悩まされ、今年の3月下旬には近郊のシトゥ・ギントウン・ダムが決壊して200名以上が死亡するという惨事も起きた。こうしたことからしても、水資源管理についてのフォーラムをインドネシアで開催する意味は大きかった。

HAKU 会長スピーアンディ氏、本学総長松本紘氏、インドネシア科学院 (LIPI) 長官ウマル氏、本学生存圏研究所副所長津田敏隆氏、本学名誉教授山田勇氏、LIPI 研究員ピーター氏らによる含蓄に富んだス

ピーチが初日に行われた。その後の HAKU 総会では、本学企画部社会連携推進課長川口伸太郎氏による同窓会活動についての説明の後、次期執行部をめぐる話し合いが行われた。翌日、午前中は3セッションで議論と質疑応答が行われた。その後、本研究所河野泰之氏がそれらを見事にまとめ上げ、所長水野広祐氏が総括スピーチを行ってフォーラムは無事終了した。NGO 活動家や大学生も参加した楽しい会であった。

（文責：岡本正明）

第4回 京都大学附置研究所・センターシンポジウム

「京都からの提言 学問のつながりのユニークさ
—それがつくる明るい未来」開催

松本 総長



益川 名誉教授



藤井 理事・副学長



杉原 東南アジア研究所教授

2005年度から毎年開催されてきた京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの提言」は、本年度、東南ア研が事務局となって、「学問のつながりのユニークさ—それがつくる明るい未来」と題して2009年3月14日、名古屋駅前の名鉄ホールにおいて開催された。

松本紘総長と藤井信孝副学長がまず挨拶の言葉を述べた。その後、田中雅一教授（人文研）は、セックスなど、普段、話すことも難しい対象にこだわることによって見えてくる日本社会の別の面を話し、こだわることの意義を強調した。次に矢野浩之教授（生存研）が、セルロースを新素材として自動車やテレビの基盤材料として使うことが可能となる「99.8%の自然の力を0.2%の人間の力で引き出す」研究を紹介した。さらに幸島司郎教授（野生動物研究センター）は、雪虫をとおした氷河生態系の研究や、「イルカはどうやって眠るのか？」などのユニークな研究を紹介し、「自分の眼で見て頭で考える」ことの楽しさ大切さを語った。さらに杉原薫教授（東南ア研）は、

人類がどのように危機を乗り越えて生存基盤を持続させてきたのかという問いに、グローバル・ヒストリー研究がどのように光を当てているのかという最新の研究を語った。そして、益川敏英教授（京大名誉教授・元基礎物理研所長）は、「素粒子論研究の思い出」と題し、昨年度ノーベル物理学賞を受賞した研究を行っていた頃の研究室の様子などを話した。

その後、山脇幸一教授（名古屋大学）らも交えてパネルディスカッションが行われ、独創的な研究が、素朴な興味や知りたいと思う気持ちの先に実現する道筋について議論を行った。

会場には、雨天にもかかわらず約600名が参加して熱心に聞き入り、「京大には他の大学にはない別の風が吹いていると思いました（50歳代農家主婦）」、「科学が好きになった（10歳代男子学生）」、「研究に対する思いを知ることができました（10歳代女子学生）」、「聞き応えのある話に感銘しました（50歳代男性法人職員）」などの感想が寄せられた。

（文責：水野広祐）



「フィールド・ステーションを活用した先導的 地域研究における若手研究者交流事業」を終えて



▲上：ワークショップ(2009/3/3)でのディスカッション風景。この時の発表・議論にもとづきプロシーディングス *New Paradigm for Human Beings and Nature: Frontier of Asian Area Studies* が作成された。

下：漁協婦人部による魚料理法の説明に聞き入る招へい研究者。エクサカーションでの1コマ(滋賀県守山漁業協同組合にて2009/3/7)。

2009年3月、本研究所は、日本学術振興会からの助成を受け、標記のような国際交流プログラムを実施した。大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、生存基盤科学ユニットとの協働のもとに行われたこの事業は、京都大学が東アジアに設置したフィールド・ステーションを拠点に、若手研究者交流のいっそうの深化をめざそうとしたものだった。より具体的には、日本からの派遣が中心だった若手交流を相手国からの招へいによって双方向化すること、相手国の人材育成に寄与すること、研究者間の知的ネットワークを形成し地域研究の活性化を先導することを目標として掲げた。各招へい者は、14日間にわたる滞在期間中、ワークショップでの発表、京滋

フィールド・ステーション運営事業の見学、琵琶湖環境センターでの講義の受講、G-COE 国際シンポジウムへの参加等の日程をこなし、同シンポジウムの盛り上げ、プロシーディングスの出版、東アジアに設置した各フィールド・ステーション紹介データの改善などの成果を、本研究所や大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、生存基盤科学ユニットに残していった。一方、招へい者ら自身が実際に挙げた今回のプログラムから得たメリットとは、「Humanospere」をはじめ、いくつかの斬新かつ刺激的な学術概念を知り得たこと、多くの研究者と知り合いになれたこと、研究成果発表の貴重な場を得られたことであった。

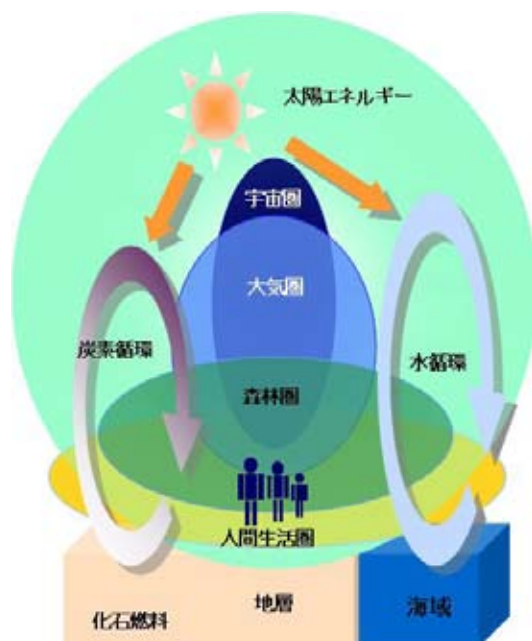
(文責：倉島孝行)

Global COE News

G-COE プログラムでは、持続型生存基盤に関する議論を行う上で、地球圏、生命圏、人間圏の三つの「圏」の概念を用いている。本プログラムには様々な研究機関が参加しており、人間圏に関しては東南アジア研究所、ASAFAS、地域研究統合情報センター等が、生命圏は生存圏研究所(木質グループ)、農学研究科等が、地球圏は生存圏研究所(宙空電波グループ)、防災研究所等に過去の研究実績があり、まずはそれらを元に統合的な議論を行ってきた。ただし従来の学問分野のディシプリンの連携のみでは不十分であることから、G-COE 助教・研究員を中心に新た

な学問分野を模索・提案している状況である。現在プログラムメンバーで執筆し印刷中である単行本『地球圏・生命圏・人間圏 — 持続的生存基盤とは何か』においても、執筆者が各自のディシプリンを少しずつはみ出しながら、三つの「圏」の統合的な研究や、境界領域研究の必要性を論じている。本プログラムは開始から3年目になるが持続型生存基盤の構築に向けた実質的な成果はこれからであり、より多くのメンバーが地球環境の持続性を活かした生存基盤のありかたを提案することが重要である。

(文責：甲山 治)



生存圏からの視点の概念図

GIS-IDEAS, PNC and ECAI Joint International Symposium 2008

“Towards Sustainable and Creative Humanosphere” ハノイで開催

2008年12月4～6日、JVGC 日本ベトナム空間情報学コンソーシアム、太平洋隣国協会 (PNC: Pacific Neighborhood Consortium、台湾中央研究院)、電子地理情報プロジェクト (ECAI: Electronic Cultural Atlas Initiative、カリフォルニア大学バークレイ校) の3組織が主催し、当研究所が共催する GIS-IDEAS (International Symposium on Geo-informatics for Spatial-Infrastructure Development in Earth and Allied Sciences)、PNC and ECAI Joint International Symposium 2008 がベトナム・ハノ

イのハノイ工科大学において開催され、世界約14カ国から約270名の参加があった。今回の国際会議は、“Towards Sustainable and Creative Humanosphere”を統一テーマとし、アジア地域を中心とした持続型生存基盤の構築やそれらへの空間情報学の応用について議論された。当研究所からは、グローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の共催を得て「地域情報学セッション」を開催した。本セッションでは、河野泰之教授の基調講演に続き、東南アジアの都市研究における地域情報学の応用、空間情報技術の

革新と持続型生存基盤への貢献などに関する研究報告及びパネルディスカッションが行われた。また、同じ期間に第3回ベトナム学国際会議がハノイ国際会議場で開催され、約1,000名の参加があった。基盤研究(S)「地域情報学の創出—東南アジア地域を中心として」のコア研究であるハノイ・プロジェクトからは、桜井由躬雄東大名誉教授、柴山守、米澤剛特任研究員が参加して、地域情報学によるハノイ都市形成過程研究についての報告を行った。

(文責: 柴山 守)

JSPS-NRCT Core University Program

Workshop on Popular Culture Co-productions and Collaborations in East and Southeast Asia,

Co-sponsored by CSEAS and the G-COE Program Towards a Sustainable Humanosphere

The workshop on Popular Culture Co-productions and Collaborations in East and Southeast Asia took place in December 10-11, 2008, at the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University. The purpose of this workshop was to examine the recently emerging regional cultural production system in East and Southeast Asia and analyze some of the latest co-productions and collaborations in the making and marketing of musical and visual cultural commodities, such as television dramas, music, animation, and movies. The papers at the workshop focused on recent collaboration and co-productions relating to the Japanese, Chinese, Korean, Philippine, and Indonesian culture industries.

This workshop is part of a wider research project that seeks to understand the cultural economics underlying this

field and the processes of region-wide appropriation of cultural formulas and styles. Beyond the case studies that were examined, this project offers an opportunity to further explore the production and exploitation of cultural imaginaries in the context of intensive regional circulation of cultural commodities and images and to present a potential for a regional economy of transcultural production. Moreover, this project attempts to develop a theoretically plausible framework to look at the transnational flow and consumption of popular culture across East and Southeast Asia and not rely only on the theories of globalization or global-local relations.

A group of 12 scholars participated in this project. They include Eyal Ben Ari, the Hebrew University of Jerusalem; Nissim Otmazgin, the

Hebrew University of Jerusalem; Robert Eford, Seattle University; Lisa Yuk Ming Leung, Lingnan University; Shim Doobo, Sungshin University; Jean-Marie Bouissou, Sciences Po; Nakano Yoshiko, Hong Kong University; Kukhee Choo, University of Tokyo; Abidin Kusno, University of British Columbia; Rolando B. Tolentino, the University of the Philippines; Caroline Hau, CSEAS; and Helena Grinshpun, Kyoto University. We plan to publish the findings of this project in an edited volume.

(Reported by Nissim Otmazgin)



「東南・南アジアの労働集約型工業化」の開催 “Labour-intensive Industrialisation in South and Southeast Asia”

「東南・南アジアの労働集約型工業化」を経済史的に検討するための国際ワークショップが2008年12月20～21日に稲盛財団記念館で開催された。基盤研究B「インドにおける労働集約型経済発展と労働・生活の質に関する研究」（2006～08年度）、拠点大学事業・プロジェクト9「アジアの国際経済秩序」（2006～08年度）およびグローバルCOEイニシアティブ1の共催で、アジア諸地域の比較を念頭においてそれぞれのプロジェクトの成果を報告する

試みであった。

インド研究からは、招待したTirthankar Roy氏（ロンドン大学）と主要メンバー6名が成果を発表し、東南アジア・プロジェクトからは、タイと日本からそれぞれ2人のメンバーが成果を報告した。また、グローバルCOEで進めている比較史的視点と融合させるべく、外部からインド、中国、日本の専門家を呼んで、労働集約型工業化と環境制約の地域差との関係について議論した。これらの試みの一部は、2008年3月に

開催したワークショップ「東南アジアの労働集約型工業化」の延長線上にあり、2009年8月にユトレヒトで開催される世界経済史会議のセッションでも続けられる。

バンコクの工業化に関するPorphant Ouyyanont氏の報告はワーキング・ペーパーとして、急逝されたSomboon Siriprachai氏の報告は、遺稿集の一部として、それぞれ刊行される予定である。

（文責：杉原 薫）



シンポジウム

「土屋健治と『カルティニの風景』」

2009年2月28日 大東文化大学法科大学院

◀懇親会で挨拶をする水野所長

2009年2月、本研究所の教授であった土屋健治さんが亡くなって13年が経った。そこで、彼の親友押川典昭さんが13回忌の意味も込めて本シンポジウムを企画した。その目的は、押川さんの言葉では、「アカデミズムの枠を超えて読まれてきた『カルティニの風景』を取り上げ、その意義と可能性を、そしてまた限界を検証し、彼が残した仕事について今日の視点およびインドネシア・東南アジア研究の枠を超えた広がりの中なかで考える」ことであった。

90名以上の参加者で会場は埋まる中、まず、土屋さんの教え子貞好康志さんが土屋さんの生涯と仕事を振り返った。それから、富山一郎さ

ん、小林寧子さん、朴裕河さん、小野正嗣さんらが『カルティニの風景』を思いのままに語った。そして、富永泰代さんが、語られてこなかったカルティニ像を示してくれた。続く総合討論では、ナショナリズム、言葉の力、カルティニなどをめぐって会場からパネリストたちに質問が飛んだ。最後に末廣昭さんが、「銭湯で身を清めてから」学生たちの推薦状を書くという土屋さんらしいエピソードに触れてシンポジウムは終了した。

さて、押川さんの狙いは達成されたであろうか。『カルティニの風景』は、アンダーソンさんの『想像の共同体』に触発された土屋さんが20

年前に書き上げた本であり、ナショナリズム研究として読むならその現代的限界は否めないであろう。しかし、土屋さんがこよなく愛したメステイソの文化現象の更なる考察は可能だろうし、他にもまだ発展させるべきことは数多い。その研究は我々教え子に託されているということだろう。

それにしても、今なおこれだけの土屋ファンがいるという事実、本当に土屋さんというのは「人たらし」な人だ。5年後、森山幹弘さん、貞好さん、左右田直規さんなど教え子たち主催で第2回土屋シンポを京都で開く予定である。乞うご期待。

（文責：岡本正明）



▲上：PLAにより漁村の抱える問題を主婦たちと話し合うECFのメンバー（2009年2月安藤撮影）
下：サイクロンの高波の危険に晒されている、堤防のないベンガル湾に望むHatia島の村（2009年2月安藤撮影）

文部科学省委託研究プロジェクト（2007年4月～10年3月）の目的は、バングラデシュとネパールにおける開発と環境保全という二律背反的問題への対応を、当事者（とくにこれらの問題に日頃から取り組

世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業

—南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究—

んでいる NGO) の実践経験から考察していく試みである。「社会的ソフトウェア」とは、当事者の経験を収集し、利用可能な体系に整えるメカニズムを意味している。バングラデシュでは環境関連の112のNGOを、ネパールでは50のNGOの組織構成と活動に関するインベントリーを作成し、日本ではバングラデシュとネパールで活動するNPOと開発コンサルタントの4名の委員によるタスクフォース委員会を立ち上げている。バングラデシュでは、112のNGOから、活動の内容と地域性を考慮し、16のNGOによる「社会的ソフトウェア構築委員会」をEnvironment Coping Forum (ECF) の名称で結成し、委員会の

メンバー組織から各1名が参加する参加型相互学習 (PLA: Participatory Learning and Action と KJ 法) 活動を展開している。バングラデシュの環境問題が起きている典型的な5地域である①ジョムナ川流路変動の影響をうける中州地域、②地盤侵食の深刻なノハカリ県ハティア島、③大規模な湿地帯、④焼畑農業による土地劣化地域、⑤サイクロンと洪水に頻繁に見舞われ貧困問題も深刻なボリシャル県、のECFのメンバーがNGOの各プログラムを順に参加型相互学習し（現在①と②が終了）、「社会的ソフトウェア」構築を目指している。（プロジェクトホームページ <http://ecf.cseas.kyoto-u.ac.jp/>）

（文責：安藤和雄）

ASAFAS 創立 10 周年 記念行事開催

本年、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (ASAFAS) は設置されてから10年の節目を迎えました。これを記念して3月7～8日に同窓生が集い、創立10周年記念行事を行いました。

3月7日には「地域研究の新世代と語る」と題した創立10周年記念シンポジウム、同窓会総会、創立10周年記念祝賀会を行いました。シンポジウムでは、現在は企業、国内外の研究機関などで活躍している修了生11名が、ASAFASで学んだことや京都での生活について語りました。どの発表も味のあるものでしたが、1つだけ印象に残った言葉をあげておきます。「研究のネタはどこにでもある。」ASAFASのHP上 <<http://asafas.kyoto-u.ac.jp/research/10thAnniv.html>> に全発表についてのレポートや当日の写真が掲載されているのでぜひご覧下さい。

ASAFASの修了生、在学生、教職員から構成される同窓会は2007年4月に設立されました。総会では海外支部の設立など楽しいことが決まりました。その後に行われた祝賀会の雰囲気は上のHPの写真が伝えています。ASAFASの志である地域を越えた相互理解を体現しているように思いますがいかがでしょうか？

続く3月8日には「実務と研究を架橋する実践的地域研究者への道」と題したランチオンセッションを開催しました。これはJSPSの「大学院教育改革支援プログラム」に採択された「研究と実務を架橋するフィール

ドスクール」が主催したもので、タンザニアから駆けつけた修了生2名がASAFASで学んだ地域研究を本国で発展させる意義について語ってくれました。

ASAFASの卒業生は国籍も進学前の経歴も多岐にわたっています。その多様な人々がASAFASでの経験を触媒にして秘めていた可能性を花開かせています。ASAFASに身をおくものとして、その意義を改めて感じた2日間でした。

（文責：高田 明・ASAFAS）



桜井由躬雄先生 ベトナム学賞受賞

歴史学と地域研究を融合させた歴史地域学の提唱者であり、今も現役で研究活動が続けられている桜井由躬雄先生（東京大学名誉教授・日本ベトナム研究者会議会長）が、ベトナムのファン・チャウ・チン文化財団より第1回ベトナム学賞を受賞されました。本賞は、ベトナム国内の第一級の学者による選考を経て、外

国人によるとくに優れたベトナム研究に対して与えられる賞です。本賞の受賞は、桜井先生の長年にわたるベトナム地域研究の成果が研究当該国であるベトナムの学者に評価されたことを示すものであり、まさに地域研究の一つの到達点とよぶべき出来事だといえるでしょう。桜井先生は東南アジア研究センターに

1977-90年の間在籍され、ベトナムのみならず東南アジア研究に多大な功績を残されました。1993年から開始された総合的村落研究「バックコック研究」は、ベトナムで近年ようやく導入された地域研究の重要な模範となっています。

（文責：柳澤雅之・CIAS）

2009年度 科研費プロジェクトリスト

■基盤研究 (S)

- 2005-09年度
- 地域情報学の創出——東南アジア地域を中心にして
- 研究代表者：柴山 守

■基盤研究 (S)

- 2007-11年度
- 東南アジアで越境する感染症——多角的要因解析に基づく地域特異性の解明
- 研究代表者：西淵 光昭

■基盤研究 (A) 海外学術調査

- 2007-10年度
- 東南アジアの「非伝統的」安全保障——国家の対処能力と地域協力体制の現状と課題
- 研究代表者：Patricio N. Abinales

■基盤研究 (A) 海外学術調査

- 2007-10年度
- アジアにおける稀少生態資源の攪乱動態と伝統技術保全へのエコポリティクス
- 研究代表者：山田 勇

■基盤研究 (A) 海外学術調査

- 2009-13年度
- ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究
- 研究代表者：安藤 和雄

■基盤研究 (B)

- 2006-09年度
- 東南アジア大陸部における土地利用変化のメカニズム——フィールドワークとRSの結合
- 研究代表者：河野 泰之

■基盤研究 (B)

- 2009-11年度
- 「化石資源世界経済」の形成と森林伐採・環境劣化の関係に関する比較的研究
- 研究代表者：杉原 薫

■基盤研究 (B) 海外学術調査

- 2008-11年度
- グローバル化時代の東南アジアにおける地方政治の新展開——首都、エネルギー、国境
- 研究代表者：岡本 正明

■基盤研究 (B) 海外学術調査

- 2008-11年度
- 冷戦期アメリカの知的ヘゲモニーとアジア地域政策——フォード財団の学術助成を中心に
- 研究代表者：小泉 順子

■基盤研究 (B) 海外学術調査

- 2008-10年度
- ドバイで働くフィリピン女性のアイデンティティの再編——キリスト教徒とムスリムの比較
- 研究代表者：細田 尚美

■基盤研究 (B) 海外学術調査

- 2009-11年度
- 中国の台頭と東南アジアの政治社会的変容——国際関係、トランスナショナル、社会
- 研究代表者：Caroline Sy Hau

■基盤研究 (C)

- 2009-11年度
- タイ・ミャンマー国境域移動者の生活実践——少数民族の社会ネットワークと文化再生産
- 研究代表者：速水 洋子

■基盤研究 (C)

- 2009-11年度
- バングラデシュ農村変容15年——同一村再調査に基づく農村階層構造の変化を中心に
- 研究代表者：藤田 幸一

■基盤研究 (C)

- 2009-11年度
- 耐乾性外来樹の拡大と地域水文／経済への影響
- 研究代表者：佐藤 孝宏

■基盤研究 (C)

- 2009-11年度
- 地域在住高齢者の抑うつ危険因子とグループワークによる介入効果の縦断的検討
- 研究代表者：和田 泰三

■若手研究 (B)

- 2008-10 年度
- インドネシア華人の再移民と中国・香港・台湾——バンカ・ブリトゥン州を起点に
- 研究代表者：北村 由美

■若手研究 (B)

- 2008-10 年度
- 資源を巡る対立・協調の多元性と固有性——東南アジアの事例から
- 研究代表者：生方 史数

■若手研究 (B)

- 2008-09 年度
- 「アフリカの角」地域における紛争・貧困のリスクに対処するローカルな公共性の構築
- 研究代表者：西 真由

■若手研究 (B)

- 2009-12 年度
- カンボジア仏教の再生と変容に関する総合的研究——ヒト・モノ・カネの移動と制度の再編
- 研究代表者：小林 知

■若手研究 (B)

- 2009-11 年度
- グローバル時代におけるアフリカ遊牧社会の生存戦略と発展の潜在力に関する研究
- 研究代表者：孫 曉剛

■若手研究 (B)

- 2009-11 年度
- トルコ地方小都市、世俗主義とイスラームのはざまの<社会>——震災復興の経験から
- 研究代表者：木村 周平

■若手研究 (B)

- 2009-10 年度
- 英国東インド会社トンキン商館文書を用いた近世ベトナム史の新研究
- 研究代表者：蓮田 隆志

■若手研究 (B)

- 2009-10 年度
- 腸炎ビブリオ病原性菌株の定量法の開発とフィールドでの魚介類検査への応用
- 研究代表者：中口 義次

Colloquia

“Eunuchs in Seventeenth-Century Vietnam”
by Hasuda Takashi
November 27, 2008

In seventeenth- and eighteenth-century Vietnam, eunuchs played important roles in many fields. This presentation started from the investigation of sources on one such eunuch, Van Ly Hau, and went on to discuss the roles and status of eunuchs as a whole. Van Ly Hau was a unique eunuch since his name appears in Japanese, Korean, and Vietnamese sources. Japanese and Korean sources show that he was a key figure in running Vietnam's foreign trade. Along with bureaucrats and military officers, eunuchs participated in the competition for the throne among Vietnam's princes. Hence, eunuchs were not henchmen depending on the king's favor but regular members of political life in the Lê dynasty.

“Cochinchinese Coin Casting and Circulating in Eighteenth Century Southeast Asia”
by Li Tana
January 22, 2009

While much has been said about Chinese business networks in modern Southeast Asia, when coin casting and circulating were discussed, they were examined mostly within a certain local context. This paper explored links in the coin business between eighteenth century Cochinchina and the different ports of Southeast Asia. The evidence seems to indicate that closer connections existed in this important front of Chinese business, particularly between mining in Tongking, copper and zinc importing from Japan and China, coin casting in Cochinchina, and circulation in China, Cambodia, and the Archipelago.

「在来暦法研究のこれまで——バリ、ロンボク、スンバワの事例から」
五十嵐 忠孝
2009年3月26日

ここに話題として取り上げる「在来暦法」とは今日もおインドネシアの農村漁村で使われる、季節の移行を察知する装置である。その仕組みは単純で、特定の自然現象——動植物、雨、風、波、星等々——を手掛りに年初とそれに続く暦月が決定され、置閏もこの過程で行われる。「在来暦法」は、このような仕組みの必然的な結果として、今日我々が用いる「こよみ」とは異なり、将来の一時点の日月を必ずしも正確に予想することが出来ない。

人事

教員人事

<昇任>

小泉順子 社会文化相関研究部門准教授は2009年1月1日付け、教授に昇任。

甲山 治 特定助教(G-COE)は2009年4月1日付け、人間生態相関研究部門准教授に昇任。

<新任>

非常勤研究員

山根悠介 (任期 2009年4月1日～10年3月31日)

学振特別研究員

長岡伸介 (任期 2009年4月1日～12年3月31日)

<国内客員部門>

任期 2009年4月1日～10年3月31日

脇村孝平大阪市立大学教授は再任。



本名 純 教授

1992年テンプル大学卒。94年国際基督教大学大学院行政学研究科博士前期課程修了。99年オーストラリア国立大学 Ph.D. 取得。同年インドネシア戦略国際問題研究所(CSIS)客員研究員、2000年立命館大学国際関係学部専任講師、03年同学部助教授、09年同学部教授。

[主要著書・論文]

Military Politics and Democratization in Indonesia, Routledge, 2003. ▽ *Local Civil-Military Relations during the First Phase of Democratic Transition, 1999-2004. Indonesia* 82, 2006. ▽ *Instrumentalizing Pressures, Reinventing Mission: Indonesian Navy Battles for Turf in the Age of Reformasi. Indonesia* 86, 2008.



関野 樹 准教授

1991年信州大学理学部生物学科卒。93年同大学大学院理学研究科生物学専攻修了。98年京都大学大学院理学研究科動物学専攻修了、博士(理学)取得。99年京都大学生態学研究センター講師、2001年(財)国際湖沼環境委員会調査研究科研究員、02年総合地球環境学研究所研究推進センター助教授、07年同准教授。

[主要論文]
Application of Knowledge Management to Environmental

Management Projects: A Case Study for Lake Management. *Lakes Reserv.* 11: 97-102, 2006. (共著) ▽ 「T2Map — 時間情報に特化した解析ツール」人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, *IPSSJ Symposium Series* 2007(15): 183-188. (共著) ▽ 「時間に基づいた情報解析ツール」『アジア遊学』113: 140-148, 2008.

<特任教授>

(任期 2009年4月1日～10年3月31日)

中島成久 教授

所属:法政大学国際文化学部 専門分野:文化人類学・民俗学

近藤まり 教授

所属:立命館アジア太平洋大学 専門分野:地域研究、経営学

小野啓子 教授

所属:沖縄大学法経学部 専門分野:都市計画、まちづくり

外国人研究者人事

◆外国人研究員

Francis Loh Kok Wah (マレーシア)。マレーシア科学大学教授。2008年12月1日～2009年4月15日。「マレーシア・サバ州のカダザンドゥスン人——エスノナショナルリズム、開発、連邦制の政治、1900-2004年」

Ronald Duane Renard (アメリカ合衆国)。UNODC等プロジェクト企画・評価員。2009年1月5日～6月30日。「ミャンマーおよびタイにおける山地居住者の生活へのヨーロッパの影響」

Patarapong Intarakumnerd(タイ)。NSTDAプロジェクトリーダー。2009年2月1日～4月30日。「タクシンの遺産——タイの国家イノベーションシステムと競争力の影響」

Supiandi Sabiham (インドネシア)。ボゴール農科大学農学部土壌・土地資源学科教授。2009年2月16日～8月15日。「インドネシアにおける泥炭低湿地管理に関する研究」



Andreas Neef (ドイツ連邦共和国)。

ホッヘンハイム大学連携研究プログラム主任研究員。2009年4月1日～8月31日。「東南アジア大陸部における資源保全の政治、水管理のガバナンス、流域の多義性」

◆招へい外国人学者

Apichai Shipper (アメリカ合衆国)。南カリフォルニア大学助教授。2008年12月3日～2009年1月31日。「日米における移民政策の研究」

Song Jenn-jaw (台湾)。国立成功大学政治経済学研究所所長。2009年1月7日～3月6日。「東南アジアの中の日本に関する政治経済研究——1997年から2007年までの発展戦略とモデルに関する一分析」

Tan Sooi Beng (マレーシア)。マレーシア科学大学文学部教授。2009年1月24日～2月6日。「社会改革のためのコミュニティ劇場——発展、アプローチ、手法と成果の記録」

Petrus Jacobs Van der Eng (オランダ)。オーストラリア国立大学経営情報管理学院商経学部准教授。2009年2月9日～17日。「アジア経済史、アジア経済論研究についての意見交換及び資料収集」

Mochtar Pabottingi (インドネシア)。インドネシア科学院政治研究センター研究員。2009年3月1日～10年2月28日。「日本政治に見る民族的主観性」

Toh Kin Woon (マレーシア)。ペナン州選出元上院議員。2009年3月1日～8月31日。「議会での政治的権利の配分と社会正義への影響」

Sangkapitux Chapika (タイ)。チェンマイ大学農学部農業経済学科准教授。2009年4月1日～8月31日。「食品をめぐる生産者と消費者のネットワーク形成——タイ北部山地の農産物を対象として」

◆外国人共同研究者

Kim Soben (カンボジア)。王立農業大学講師。2009年3月1～14日。「森林保全と木炭生産に関する研究」

<退職>

宮西香織里 (学振特別研究員)

事務職員人事 (4月1日付)

□窪田耕治専門員は工学研究科教務課長へ配置換。後任には、田川義人、人間・環境学研究科専門員。

□上田和雄総務掛掛長は工学研究科総務課掛長に配置換。後任に湊秀人、医学研究科掛長。

□加来恵太教務掛掛長は教育推進部共通教育推進課掛長へ配置換。後任に中尾知里、法学研究科掛長。

□今井淳二会計掛事務職員は施設環境部施設企画課事務職員へ配置換。後任に松重葉子、企画部企画課事務職員。

Visitors' Views

Academic Life in Kyoto



Oekan S. Abdoellah

My past six months living in Kyoto has been a special time in my life and being a visiting research scholar at the Center for South East Asian Studies (CSEAS) has

been a great opportunity. CSEAS is an excellent place to study Southeast Asia and its dynamics. The Center's interdisciplinary approach gave me the opportunity to meet members of the academic community from various disciplines of science. Exchanging ideas gave me a more comprehensive understanding of my research project on the role of agroforestry in resource-poor tropical environments.

Writing academic papers and attending international seminars made my time here

productive and reminded me of my core duty as a scientist. We have the scientific obligation to transfer knowledge through teaching and to explain phenomenon through research, and also the moral and social obligation to help society solve its problems through the results of our research. On the one hand, there are many unexplained dimensions to be explored in every phenomenon; on the other hand, there is the need to improve the quality of human life. Here, within academic discourse in seminars and discussion

forums, I found a place to develop my interest in sustainable rural development for natural resource management. I have written about these ideas, concepts, and examples of best practices, which I hope can be implemented. Input and critiques from fellow researchers and scholars enriched my research and gave me additional incentive to learn new things, an opportunity to recharge my battery.

I sincerely hope the academic life I have enjoyed at CSEAS can be experienced by other, especially young, researchers and scholars. I therefore wish to strengthen our collaboration with Kyoto University in the near future in order to develop more research into sustainable rural development for natural resource management.

(Visiting Research Fellow)



Of Yogyakarta and Kyoto



Tatik Saadati Hafidz

A travel guide I read before leaving for Japan in early autumn of last year described Kyoto as “the city of paradoxes.” I had never been to this ancient capital of Japan, although I have visited its present one on work-related trips, so I was eager to see it with my own eyes.

And I can't agree more. Taking a quick tour around Kyoto, I marveled at these amusing paradoxes. Kyotoites are arguably spiritual people: shrines, temples, and places to pray for lost loved ones dot nearly every inch of

the city. But take a stroll down Gion, home to centuries-old geisha art and its modern-day versions, and you'll see that they are enthusiastic pleasure seekers, too. Kyoto strives to guard its cultural treasures: from the impressive Imperial Palace to charming low-ceilinged machiyas, all are in perfectly preserved condition. Yet it also embraces modernity: the ultra-modern, all-concrete structure of Kyoto station is a testament to this.

As a former resident of Yogyakarta, the ancient capital of Mataram Kingdom and a sister city of Kyoto, I felt both envious and sad. Like Kyoto, where the most refined Japanese is spoken, Yogyakarta boasts the most sophisticated Javanese culture. But unlike Kyoto, which makes the conscious effort to blend modernity and antiquity, Yogyakarta seems to surrender to forces of modernisation that erode its unique past. The façade of Yogyakarta is changing: landmark buildings are turned into shopping malls, lush green paddy fields into five-star hotels. And the sacredness of the Keraton, once the heart and soul of Javanese civilisation, is fading fast; it is now a shadow of its magnificent past.

Perhaps the time has come for Yogyakarta and Kyoto to engage in a sisterly act of sharing best practices to preserve their cultural heritages, for the whole world to see and enjoy.

(Visiting Research Fellow)



Alas, Only a Short Stay



Francis Loh Kok Wah

It has been an exciting four and a half months for me at the CSEAS, Kyoto University. There were many highlights to my stay. Intellectually, I had the opportunity to interact and exchange views with Japanese and other Southeast Asian scholars almost weekly, if not daily. I also participated in several engaging international conferences: “Popular Culture: Co-Production and Collaborations in East and Southeast Asia,” in December 2008; “The Making of Southeast Asia from Macro and Micro Perspectives,” in February 2009; and yet a third on “Comparative Forest Policy-Making,” also in February. No doubt, the CSEAS is as lively and stimulating as the other academic centres of Southeast Asian Studies I have been associated with, among them those at Cornell, SOAS, Monash, Melbourne, and NUS.

There were also non-academic highlights: I enjoyed the changing seasons from Autumn to Winter to Spring; the changing climate and colours make Kyoto so very exciting, especially Sakura! I will also treasure my images of the goings-on along the Kamo River. No matter what the season, people were jogging and having picnics; would-be artists were photographing and painting scenes of the hills, the trees, and the river; parents were out walking alongside their children on bicycles, the birds being carried up by the winds and then almost crashing down into the waters – all, very warm and endearing. It would be lovely to see Southeast Asians caring more for their rivers and using them in Kamo-fashion. Alas, it is time for me to leave. But I go feeling rejuvenated and with fond memories.

(Visiting Research Fellow)

My Fabulous Time in Kyoto



Patarapong Intarakumnerd

I came to Kyoto in early February 2009, in mid winter. I was told by several Japanese friends that it was the coldest month in Kyoto. I had been looking forward to coming while I was in Bangkok. After all, Japan is my favorite foreign country, with its great combination of oriental charm and western modernity. I had been in Kyoto a few times before taking the visiting fellow position, each time for only a few days. I thought I knew something of the place and had visited the most interesting sites.

I could not have been more wrong. Living here was so different from just visiting for a few days to attend seminars. I discovered other aspects of Japan and several not-so-well-known (to foreigners) but very lovely places. I was very touched by Japanese temples and gardens. I made friends with several Japanese inside and outside the Center. I enjoyed chatting and spending time with other visiting scholars, with whom I developed warm and genuine friendships. Together we initiated an informal discussion every Thursday, taking turns to present our works over lunch. As a result, I learned new things outside my area of interest. My stay in Kyoto has been one of the most fabulous times of my life and I will cherish it forever.

(Visiting Research Fellow)

Endeavor is a Tradition of Japanese Life



Supiandi Sabiham

One of the most memorable experiences of the last 25 years of my life was the opportunity to study agricultural sciences at the Division of Tropical Agriculture, Kyoto University, from 1983 to 1988. My five-year experience as a student at one of the world's most prestigious universities gave me many sweet memories of a fascinating academic atmosphere and a very specific tradition of Japanese life.

During my first year of study, I lived in the new Shugakuin International House. I was very lucky to be the first resident of a nice single man's room (G-228 to be exact). As an international resident, I gained very important experience in understanding the interesting cultures of friends from several countries.

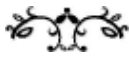
My second year of study, I had to move, and I chose a Japanese apartment in an sub-urban area of Kyoto City – a village in Nagaokakyo-shi – that could be reached in about 15 minutes by the Hankyu densha from Kawaramachi. I lived there with my family – my wife, son, and daughter – in order to experience living with people in an agricultural environment. Here we got the opportunity to study the real traditions of the Japanese: they are hard working, always consistent, and never late in doing anything. In my last years of study, when my family returned to Indonesia, I moved to a *geshuku*, a kind of student apartment

located very close to the campus. My daily life there was also influenced by the tradition of hard work.

As a student of the Division of Tropical Agriculture, my interest was to study the poor agricultural soils of tropical regions, to learn the Japanese language, and to discuss my topic with Japanese and other foreign students under the direction of our advisors. The first year was very hard for me as my mind wandered across the differences between the world's two great higher education systems: the American system adopted by the Indonesian government and the Japanese system with its tradition of high quality research and education lasting a thousand years. However, after several discussions with my advisors and other professors, I came to understand that the so-called *Juku* system, in which the teacher gives all his efforts to instilling topics into students, was meant to open my mind to analyzing the problems which I had deeply studied. Therefore, my study in the Japanese educational system was profitable.

I later stayed in Kyoto as a one-year Visiting Research Scholar (October 1993-September 1994), and now as a six-month Visiting Research Fellow at CSEAS (February-August 2009). These experiences at Kyoto University have produced an important conclusion for me: that people in the Kyoto University of today and the Kyoto University of 25 years ago participate in the same tradition of "endeavor." Although the modern life of the Japanese people in the university has changed, the traditions are maintained: hard working, consistent, and never late in doing anything. These have shown me that "no harvest is easy." Can Indonesian higher education adopt the endeavor-like tradition of the Japanese universities? This question

should be discussed in my university, and I hope we can adopt this culture in all our activities: “to always try to work sincerely.” Thank you. (Visiting Research Fellow)



Field Research in Difficult Areas



Ronald D. Renard

For half of my professional career I studied Karens and other smaller groups of people in Thailand and surrounding countries. I followed the conventional practice of conducting field research supplemented by reading relevant written works in libraries and archives. From this

I gained many insights into these peoples' ways of life that was the basis for both my scholarly writing and a wider, more informed understanding of the world.

For the second half of my career I have worked in development projects for UN agencies, mostly in Thailand, Laos, and Myanmar. I designed, evaluated, and managed projects, and in the course of this work, visited remote places sometimes inaccessible to non-development workers, such as Phongsaly in Laos and the Wa Region of Myanmar. Besides having the rare chance to meet people in out-of-the-way places, development work itself made me more aware of people's basic needs, how they make ends meet, and ways to deal with bureaucracies.

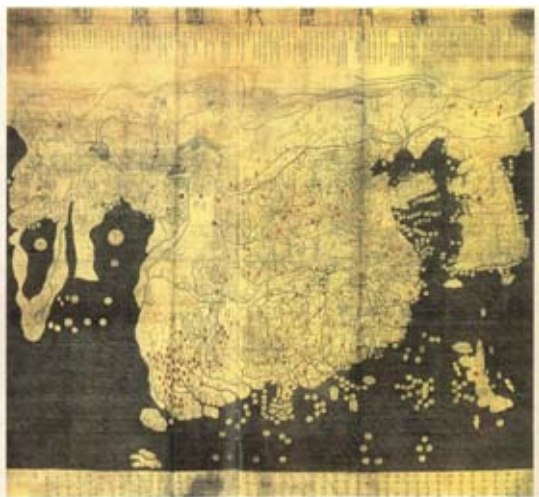
Besides learning rural development processes, I also became aware that, while academics see development workers as insensitive to local cultures, development workers

look at academics as non-productive and impractical. While both attitudes are understandable, they are equally counterproductive. Academics interested in Myanmar should be glad to know that one master's thesis and one doctoral dissertation have been written by former members of the United Nations Office on Drugs and Crime Wa Project and that more are on the way. Having worked with poor Wa farmers for years, their writings were enriched by an understanding of problems faced by the villagers and how they cope with them.

With the emergence of NGOs and related agencies as a career option for recent graduates, I invite the Center and other academics to review how working for such agencies can be coordinated with graduate studies and research in difficult-to-access areas with peoples otherwise unreachable.

(Visiting Research Fellow)

東風南信 *Reflections*



東南アジア研究の歴史的位置

——中国から見た30年

濱下 武志

◀ モンゴル時代の世界地図の中のアジア海域
「混一疆理歴代国都之図」(1402年製、龍谷大学蔵)

シンガポール東アジア研究所において2006年1月12～14日に、中国から東南アジア研究者を招いて開催されたシンポジウムの記録が『中国における東南アジア研究——成果と挑戦』(黄朝翰主編『中国的東南亜研究——成就与挑戦』世界知識出版社、2007年)と

して北京から出版された。これは、改革開放以来の30年間を中心とした中国における東南アジア研究の成果と課題を検討したものであり、中国における東南アジア研究の近況を伺う参考となるとともに、そこには同時に、シンガポールにおける東南アジア研究の位置

づけをめぐる議論も登場している。両者の対話と対比が行われており興味深い。

シンガポールにおいては、近年自らもその中に位置づけられる「東南アジア」という地域枠組みと「東南アジア研究」という研究枠組みとの関連を今後どのように捉え、両者の調整や新た

な東南アジア研究の課題を中国に向けて議論する課題を探ろうとする意図を伺うことができる。以下に簡単に内容を紹介してみたい。同書の構成は、廖建祐 Leo Suryadinata 氏（シンガポール華裔館長）による総論「中国的東南亜学者過去 30 年之初探」、袁丁、張振江各氏による中国における東南アジア研究の歴史の変遷、引き続き、広東・広西・雲南それぞれの研究機関における東南アジア研究の概況、さらに中国—ベトナム関係、中国—フィリピン関係、中国—ミャンマー関係に関する研究総括、シンガポール・マレーシア・インドネシア 3 国に関する研究総括、メコン河流域共同事業に関する研究概況、以上の 11 本の論文に加え、総合討論記録、より成っている。

同書は、現在の中国における東南アジア研究の特徴を以下の 3 点にまとめている。

第 1 の特徴は、研究機関からみると、大学と社会科学院の 2 大系統による研究が行われていることである。北京大学・中山大学（広州）・暨南大学（広州）・廈門大学などは専門的な東南アジア研究機関を設けており、数人から数十人の研究人員を有している。中国社会科学院亜太研究所は東南アジア研究室があり、雲南省と広西省の社会科学院はともに東南アジア研究組織を持つ。一方は学術研究を中心とする大学研究機関であり、他方は政策研究を中心とする社会科学院という特徴を見ることができる。

第 2 の特徴は、地域分布の特徴である。5 つの主要な研究機関は、北京大学を除いてすべて南方に集中している。すなわち、福建・広東・広西・雲南の南方各省にある。これは人的なまた地縁的な関係に負うところが多い。東南アジアの華僑華人の祖籍がこれらの各省であり、初期の東南アジア研究は東南アジアからの帰国華僑によっておこなわれていたという特徴がある。地理的にも内陸経由や海路経由によって隣接したり近接している地域であり、中

国南方に研究の中心地が集中する根拠となっている。

第 3 の特徴は、これらの背景に加え、近年の中国と東南アジアとの関係改善からも大きな影響を受けている。政治関係も緊張が緩み、経済関係も自由貿易協定などにより緊密化している。中国が戦略的な重要地域として位置付けていることから、東南アジア研究に対して大きな変化を生み出している。特に近年これまでに無い政治・経済・文化に関する強い関心が示され、広西省や雲南省の大学に東南アジア研究機関が新設されており、従来の南方各省の人的地縁的な関係による東南アジア研究に抛らない、より広範囲の学科が参入している。この動きは、従来の伝統的な東南アジア研究に対して新しい衝撃を与えており、複数の学科に跨ったり複数の主題を組み合わせた研究が進められ、中国南方に特化した東南アジア研究とは異なる傾向を見ることができる。

このような動きの背景をまとめると、1) まず中国の改革開放政策以降の中国の東南アジア政策の変化があり、このことは、2) 華僑華人研究を中心とした東南アジア研究に対する再検討が求められており、これに対応して、3) 東南アジア研究におけるこれまでのシンガポール・マレーシアを中心とした研究テーマの再編が要請されているという点を指摘できる。

廖建祐氏は、中国における東南アジア研究にはローカルな研究、現地の言語に基づいた研究が少ないという批判と、基礎研究・応用研究、理論・方法・組織においてシンガポールにおける東南アジア研究との距離が大きいことを指摘しつつ、今後中国における独自の研究の展開に期待する。

全体としての捉え方は、「東風南進」とも言えるものであり、それはまさしく現在の中国の変化、および中国と東南アジア関係の変化、さらには東南アジア自体の変化という事態の中で、中国の影響が南下・南進して東南アジア

へ至るといふ今日の局面を表現しているように思われる。そしてこのことは、日本からみたと、日本から東南アジアに向けた動きを南進と呼んだ時代や、1990 年代の台湾からの南向政策などの動きなどとは異なる展開であり大きな研究環境の変化を意味する。これは“中国からの南進”の動きであり、東南アジアは、「東」の中国・華南とその南の地域とのつながりをより強く示唆する華南＝東南アジアの時代に入ったことを意味しているのではないであろうか。そこからはまた同時に、日本をどのような文脈に位置づけるかという課題も登場して来る。（本シンポジウムの英文報告は、Saw Swee-Hock and John Wong, eds. *Southeast Asian Studies in China*. 2006. ISEAS and EAI.）

参考文献

1. Carolyn Cartier. 2001. *Globalizing South China*. Blackwell.
2. 庄国土. 2001. 『華僑華人与中国的関係』 広東高等教育出版社.
3. Nola Cooke and Li Tana, eds. 2004. *Water Frontier: Commerce and the Chinese in the Lower Mekong Region, 1750-1880*. Singapore University Press.
4. 王望波. 2004. 『改革開放以来東南亜華商对中国大陸の投資研究』 廈門大学出版社.
5. 関根政美・山本信人. 2004. 『海域アジア』 慶應義塾大学出版会.
6. Paul H. Kratoska, Remco Raben and Henk Schulte Nordholt. 2005. *Locating Southeast Asia: Geographies of Knowledge and Politics of Space*. Singapore University Press.
7. 王蒼柏. 2006. 『活在別処 香港印尼華人口述歴史』 Centre of Asian Studies, The University of Hong Kong.
8. 桃木至朗. 2008. 『海域アジア史研究入門』 岩波書店.

中山大学亜太研究院 教授
(2000-06 年 東南ア研教授)

参照点としての「国境域」

小林 知

昨年9月上旬からの赴任が半年を超えた。この間のタイは、政治情勢の混迷が続く。タイ・カンボジア国境付近の紛争は、死者をだしながら今も火種がくすぶる。11月末～12月始の「黄色い服」によるスワンナプーム空港の占拠、ソンクラーン期間中の「赤い服」と軍・警察の攻防の様子などは、テレビや新聞で注視するが、言葉の壁が歯がゆい。ただし、この間のオフィスの業務が情勢に振り回されたことはほとんどない。

ところで、タイ東北地方南部には、カンボジア語話者が100万人を超える規模で住んでいる。国境を挟んで国民国家が接する現在の「国境域」は、近代以降の産物である。寺院に

止住する僧侶の遊行や、塩・干し魚・森林産物の交易など、「国境域」とされる地域で人びとが伝統的に営んできた交流は、もともと国境など意に介さないものだった。一説によると、18世紀に、カンボジアのコンポンスヴァーイ（今のコンポントム州など）から多くのカンボジア人がスリン付近へ移住させられた。これが、現在この地方でみられるカンボジア語話者のコミュニティの起源といわれる。そして、1950年代以降にタイの政権がおこなった東北地方開発政策や各種の文化政策は、地域のカンボジア語人口を、タイ国家の一地方住民として位置づけ、表象しようとしてきた。

タイ側のカンボジア語話者の生活

史から、カンボジアを中心とした「地域」の歴史を国家史とは異なる視点から描きだし、また、革命と呼ばれたポル・ポト時代の経験の内実を「下から」「辺境から」捉えなおすことができないだろうか。1970年から始まった戦禍は、「国境」をより生々しい形で具現化させ、移動を遮った。さらに、難民キャンプが生まれ、「国民として国家に帰属すること」が社会保障を享受する権利を得ることでもあるという現実を突きつけた。そのなか、自らと異なるものとして「あちら側」を対象化する意識が育ったことは想像に難くない。この歴史は、間違いなく、カンボジア「地域」史の一部である。

(研究所 助教)

総選挙

岡本 正明

私がジャカルタ事務所に駐在していた3月というのは幸運にもインドネシアにおける選挙キャンペーンの時期と重なっていた。おかげで、選挙キャンペーン会場に行ってもその様子を実感することが出来たし、テレビで連日流れる選挙キャンペーン番組も見ることができた。そして、4月9日投票日の投票所の様子も分かったし、選挙速報番組も見ることができた。

2009年の総選挙というのは、インドネシアにとっては民主化が始まってから三度目の総選挙に当たる。99年の第1回、2004年の第2

回総選挙の時には、民主主義が制度的に定着しておらず、もしかして政治的混乱が起こるのではないかと危惧する意見がインドネシア研究者の中では多かった。私もそうした意見に傾斜しがちであった。しかし、この二度の選挙はきわめて平穏に終わった。そうしたことから、また、世論調査機関が事前に比較的精度の高い選挙予想をしていて、与党の勝利が確実だったので、今回の選挙が混乱するような気配は乏しかった。選挙管理委員会の委員たちが必ずしも選挙運営に長けた人物たちではなく、投票用紙配送の遅れ、二重登録、

死亡者の有権者登録など運営のレベルはこれまでの二度の選挙と比べれば落ちた。しかし、かつては一般的であった派手な路上キャンペーンは違法になり、首都ジャカルタともなると、選挙キャンペーン会場に多くの警察官が警備に当たって混乱を回避する努力が行われた。その結果、パプアやアチェといった独立運動の懸念が消えない地域を除けばおおむね、平和裡に選挙は進んだ。

その一方で、テレビでの選挙関連番組はお祭りの様相をこれまで以上に濃くした感がある。例えば、ある民放では「政治リング」なる番組が

あり、チアリーダーたちがボクシングのリングでひとしきり踊った後、アナウンサー二人が若き議員候補者たち四名をボクサーさながらに紹介して、彼らにビジョンやミッションを語らせていた。あるいは、少しばかりエロスの入ったダンドゥット音楽にあわせて議員候補たちが腰をくねくねとさせる踊りの後に論戦を繰り広げる番組もあった。スーパー

マンの格好をした候補者も現れた。選挙の大衆化・皮相化に私自身は幻滅したものの、私のインドネシア人の友人の意見は違った。彼に言わせれば、ある種低俗と見える番組でも選挙の大切さを伝えているだけでも良いし、そうした番組なら教育水準の低い層の人達も選挙に関心を持つ契機になるかもしれない。彼の意見が事実かどうか分からない。それで

も、今回の投票率は確実に6割を超えており、選挙に対する有権者の関心は高かった。ジャカルタ事務所にいる二人のお手伝いさんもおめかしをして投票所に出かけていった。問題含みとはいえ、インドネシアの民主化、着実に定着しているようである。(研究所 准教授)

私の地域研究論



Gender Struggles in the Southern Philippines

Patricio N. Abinales

As part of joining a Japan International Cooperation Agency (JICA) team visiting the Autonomous Region for Muslim Mindanao (ARMM), I witnessed an episode in which an ARMM director tried to impress on us how much they had progressed technologically. As he fiddled with his laptop, purportedly to show us statistics on the state of social welfare programs in this regional organization of the Philippine government, he turned to his aide and spoke in the local language, not realizing that a member of the team was from Mindanao. In the local dialect, he asked the aide to call “the girl at the backroom,” so she could turn on the computer! The woman came and, with a sneer, pressed the “Resume” button and the statistical tables popped out. The director then proceeded to explain the tables in English.

Everyone tried to look serious and interested, but I was laughing inside.

What I saw made me aware that the male-dominated public political transcript I hear from politicians

and rebel leaders also functions as a canopy to hide one of the most enduring features of Filipino-Muslim society: women’s influence. It is a power that the Islamic religion, as practiced today, is prone to conceal; it has clout that is not often allowed to display itself because it undermines the public pre-eminence of men.

Historians have traced this power as far back as the pre-colonial period. It never completely disappeared during the colonial and or even post-colonial eras. Ethnographers discover it in their observations of everyday life, while historians note its existence while observing aftermaths of political crisis.

In Muslim Mindanao, while a comprehensive overview of Muslim women power has yet to be written, scholars have noticed similar episodes. In my case I saw how much women had taken over critical features of everyday life (from child-rearing to business management, to running the political campaigns of

their husbands). I discovered later one a major reason behind this near domination — the separatist war.

One of the consequences of a war waged by a predominantly male armed separatist movement was that “non-combat” responsibilities were left to women who, with the long absence of their men, became quite adept in these tasks. In 1992, when the Moro National Liberation Front signed a peace agreement with the Philippine government, the men suddenly came back from the hills and tried to re-assume their alleged “traditional” role as heads of families, a position that was also sanctioned by Islam.

What has happened since is a quiet struggle between de facto emancipated women and male returnees over whether the former’s new powers and freedom will be allowed to continue. The episode I witnessed was just one instance of this contestation. Next time I go back to the field I hope to discover more.

(Professor, CSEAS)

研究会報告

◆ Special Seminar

▼ Anna Tsing (University of California, Santa Cruz) “Free in the Forest: Popular Neoliberalism and the Aftermath of War in the U.S. Pacific Northwest,” December 16. ▼ Thung Ju Lan (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Chinese-Indonesians in the Post Soeharto Era: Looking for a ‘Place’ or a ‘Voice’ in Politics?” December 24. ▼ Tatik Saadati Hafidz (Visiting Research Fellow, CSEAS) “A Long Row to Hoe: ASEAN Cooperation on Counter-Terrorism,” January 29. ▼ Oekan. S. Abdoellah (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Sustainable Rural Development Initiative for Natural Resource Management: Role of Agroforestry in the Resource Poor Tropical Environments of West Java, Indonesia,” April 3. ▼ Kin Woon Toh (API Fellow) “The Distribution of Political Rights in the Legislatures and Its Impact on Social Justice,” April 13. ▼ Mochtar Pabotinggi (Japan Foundation Fellow) “The Backbone of Japan in A Time of Epochal Crisis: Reading the Prospects for Nation-Democracy Symbiosis through Education, Agriculture, Industry, and Environment” ▽ Tan Sooi Beng (API Fellow) “Community Theatre in Asia: Empowering Young People to Bring About Change” ▽ Francis Loh Kok Wah (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Whither Labour and the Labour Movement in Malaysia?” ▽ Ukrist Pathmanand (API Fellow) “Human Insecurity: A Reconsideration on Thai Women Trafficking in Japan” ▼ Patarapong Intarakumnerd (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Thaksin’s

Legacy: Thaksinomics and Its Impacts on Thailand’s National Innovation System and Industrial Upgrading,” April 21. ▼ Supiandi Sabiham (Visiting Research Fellow, CSEAS) “The Indonesian Peatland: Is It Suitable for Oil Palm Growth?” April 23.

◆ 「アジアの政治・経済・歴史」研究会

第1回：12月22日 Tirthankar Roy (London School of Economics) “Water and Economic Change in South Asia” ▼ 第2回：2月17日 Pierre Van der Eng (Australian National University) “Government Promotion of Labour-Intensive Industrialisation in Indonesia, 1930-75” ▽ David Clayton (University of York, U.K.) “The Political Economy of Broadcast Technologies in the British Empire, c.1945-60”

◆ 「東南アジアで越境する感染症」研究会

1月10日 Ma. Lucila A. Lapar (International Livestock Research Institute, Vietnam) “Livestock Sector Development in Vietnam and Emerging Issues about Food Safety” ▽ 瀬尾晃司 (京都大学) 「タイ南部ハジャイ市で市販されている二枚貝の腸炎ビブリオ世界的大流行株の汚染調査」 ▽ 清水理香 (京都大学) 「インドネシア・パダン市および周辺地区の腸炎ビブリオ感染症調査」 ▽ 吉川みな子 (ASAFAS) 「シンガポールにおけるチクングニヤ熱国内流行——政治的意志を体現する都市国家の対策」 ▽ 遠藤環 (埼玉大学) 「タイの水産物流通——エビを中心に」 ▽ 藤田幸一 (CSEAS) 「タイ・ラノーンにおけるミャンマー人労働者——予備調査報告」

◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会

第40回：1月23日 吉本康子 (国立民族学博物館) 「異端から正統へ——ベトナム中南部におけるチャム・パニの宗教実践と解釈についての考察」 ▼ 第41回：3月27日 森正美 (京都文教大学) 「多元的法体制と法実践の交渉——フィリピンのムスリムに関わる婚姻事例の考察から」

◆ 共同研究集会 「気象災害軽減など人間活動の持続可能性に関する研究集会——南アジア地域を中心として」

(京都大学防災研究所＋生存圏研究所＋東南アジア研究所＋生存基盤科学研究ユニット)

【1月29日】 林 泰一 (京都大学) 「趣旨説明」 ▽ 釜堀弘隆 (気象研究所) 他 「JRA-25再解析によるインド洋熱帯低気圧活動の解析」 ▽ Roxanna Hoque (首都大学東京) 他 “Long-Term Variability Intense Precipitation and Occurrences of Flood in Bangladesh and Surrounding Area” ▽ 奥 勇一郎 (京都大学) 他 「格子点データを用いた日本陸域の極端気象現象の抽出方法」 ▽ 福島あずさ (首都大学東京) 他 「インドにおける近年の季節降水量トレンドについて」 ▽ 村田文絵 (高知大学) 他 「メガラヤ高原南嶺の夜雨とシレットの風の関係」 ▽ 林夕路 (東洋電子工業(株)) 「バングラデシュ気象局における国内およびGTS気象情報の収集と利用の実情」 ▽ 加藤丈朗 (朝日新聞) 「写真で見る伊勢湾台風被害」 ▽ 中山由美 (朝日新聞) 「極地からみる地球」 ▽ 東城文柄 (総合地球環境学研究所) 「20世紀初頭のバングラデシュ・サラソウジュ林地帯における自然環境と人々の暮らし——GIS分析を活用した歴史地理的アプローチ」 ▽ 橋爪真弘 (長崎大学) 他 「バングラデシュ農村部における気温と

死亡率の関連」▽内田晴夫（農研機構）・安藤和雄（CSEAS）「バングラデシュの洪水害と雨季稲作——ハオール地域の事例」▽林 泰一「インド亜大陸北東部の気象と人間活動」

【1月30日】坂本麻衣子（長崎大学）他「ベンガルの水環境に関する住民の意識構造の分析」▽福島翔（京都大学）他「バングラデシュの農村部における飲料水ヒ素汚染災害に関する研究」▽安藤和雄（CSEAS）「持続的発展のための農業・農村開発における文化と主体性の問題——バングラデシュと日本での試み」▽宮本真二（滋賀県立琵琶湖博物館）他「バングラデシュ中央部、ジャムナ川中流域における先史時代以降の地形環境変遷と屋敷地の形成過程」▽石川裕彦（京都大学）「ヤンゴン近郊での Nargis 被害」▽吉田龍二（京都大学）他「衛星データとモデリングによるサイクロン NARGIS の眼の構造解析」▽金森大成（首都大学東京）他「ベトナム中部で発生した豪雨とサイクロン Sidr との関係について」▽山根悠介（京都大学）「バングラデシュにおける局地的対流性擾乱の発生に伴う総観場の特徴」▽木口雅司（東京大学）他「インド・アッサム域からバングラデシュにおけるプレモンスーン降水と SRES 下における年流出量と水使用量から見積もられた将来水ストレス人口」

◆「地域情報学の創出」研究会

（「ベトナム・ハノイプロジェクト研究会」CIAS 全国共同利用研究共催）2月4日 米澤 剛（生存基盤科学研究ユニット研究員）「ハノイの地形と地下構造」▽大田省一（東京大学）「ハノイ大堤防の変遷」▽桜井由躬雄（東京大学名誉教授）「ハノイ・オールドタウンの中心軸（チュックチュンタム）」▽柴山 守（CSEAS）「ハノイ・プロジェクト総括と今後の展望」

◆「近畿熱帯医学」研究会

第14回：2月7日 山本太郎（長崎大学）「感染症国際協力最前線——新型インフ

ルエンザを例として：歴史・生態・共生の視点から」▽太田伸生（東京医科大学歯科大学）「アジアで住血吸虫病と闘う」

◆「東南アジアの自然と農業研究会」

第138回：2月20日 近藤 史（神戸大学）「なにがアグロフォレストリーへの移行を支えたのか——タンザニア南部・焼畑農耕民の社会生態史」▼第139回：4月17日 笹岡正俊（（財）自然環境研究センター）「アーボリカルチャー（arboriculture）が結ぶ野生動物と人——インドネシア東部島嶼部住民による『半自然』的な森の創出」

◆「映像なんでも観る会」研究会

第24回：3月4日「フォン・イェン監督と観る『長江の夢』」（共催：総合地球環境学研究所・中国環境問題研究拠点）脚本・製作・監督：馮艶（フォン・イェン）『長江の夢』（2007）▼第25回：4月19日「フィリピン映画『フローラ事件』『サラ・バラバガン事件』上映会」（主催：ドバイ移民研究会／共催：映像なんでも観る会、フィリピン社会研究会）ジョエル・ラマガン監督『The Flor Contemplacion Story』（1995）▽『The Sarah Balabagan Story』（1997）

◆「東南アジア歴史研究の資料と方法」研究会

「東南アジア史における人の把握——国家・『民族』・植民地主義」3月31日 小泉順子（CSEAS）「はじめに」▽坪井祐司（学習院大学）「英領マラヤにおける人口統計の変遷とマレー人概念の形成」▽左右田直規（東京外国語大学）「センサスと教科書——英領マラヤのマレー語学校教育における植民地的知の現地化」▽高田洋子（敬愛大学）「仏領コーチシナの地方統治と人口の把握をめぐって」▽伊東利勝（愛知大学）「135の民族から成るミャンマーの成立」▽菅谷成子（愛媛大学）「18世紀末葉スペイン領フィリピンにおける『パドロン』について」▽蓮田隆志（CSEAS）「1778年中越国境密入国事

件を通してみるベトナム国家の人的把握と『外国人』」

◆「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業——南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究」2008年度研究活動報告会

3月30日 趣旨報告：安藤和雄（CSEAS）「ECFの可能性」▽南出和余（CIAS）「ガイバンダ地域でのケーススタディ」▽矢嶋吉司（CSEAS）「ハティア島でのケーススタディ」▽藤倉達郎（ASAFAS）「ネパールでの社会的ソフトウェア構築委員会結成ワークショップ」

◆「 balanロンボ研究会」

第1回：4月7日 浜元聡子（CSEAS）「スラウェシからジャワへ、ジャワからスラウェシへ」

◆「21世紀のタイ——ウォッチャーが語る過去から未来へのタイ」講演会

（タイ王国大阪領事館主催、CSEAS 共催）4月24日 福井捷朗（CSEAS 名誉教授）「タムノップ——東北タイの消えつつある土堰灌漑」▽助川成也（JETRO）「『ASEAN 中でのタイ』——日系企業はタイをどう位置付けているか」▽大泉啓一郎（日本総合研究所）「タイの少子高齢化と社会保障制度」▽玉田芳史（ASAFAS）「タイ政治の今と将来——2つのクーデタとアピシット政権」▽木村滋世（日本タイ教育交流協会）「タイにおける教育・学校交流 30 年」

◆ API Seminar

12月19日 Ukrist Pathmanand（Chulalongkorn University）“Non Traditional Security: A Reconsideration of Thai Women Trafficking in Japan”▽Rufa Cagoco-Guiam（Mindanao State University）“Exacerbating Conflict or Forging Peace: Dynamics of Development Assistance for Conflict-affected Communities in Mindanao”

◆『東南アジア研究』46巻3号

Southeast Asian Studies 46 (3)

Rainfed Revolution in Northeast Thailand. Terry B. Grandstaff; Somluckrat Grandstaff; Viriya Limpinuntana; Nongluck Suphanchaimat ▼「『生』を充実させる営為」としての野生動物利用——インドネシア東部セラム島における狩猟獣利用の社会文化的意味 笹岡正俊 ▼「フィリピン市民社会の隘路——『二重公共圏』における『市民』と『大衆』の道徳的対立」日下 渉 ▼「タイ『コミュニティ林法』の17年——論争の展開にみる政治的・社会的構図」藤田渡 ▼書評 (Book Reviews) 寺西重郎・福田慎一・奥田英信・三重野文晴編、『アジアの経済発展と金融システム——東南アジア編』高阪章 ▼ Mikael Gravers, ed. *Exploring Ethnic Diversity in Burma*. Hayami Yoko ▼ R.A. Cramb. *Land and Longhouse: Agricultural Transformation in the Uplands of Sarawak*. (NIAS Monographs Vol. 110) Wil De Jong ▼ Anders Poulsen. *Childbirth and Tradition in Northeast Thailand: Forty Years of Development and Cultural Change*. Kiso Keiko

◆地域研究叢書 (京都大学学術出版会刊)

■ No.18. 坪内良博. 2009. 『東南アジア多民族社会の形成』

■ No.19. 林 行夫 編. 2009. 『〈境域〉の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』

◆ Kyoto CSEAS Series on Asian Studies

(シンガポール大学出版・京都大学学術出版会刊)

■ No.1. Koichi Fujita, Fumiharu Mieno, and Ikuko Okamoto, eds. 2009. *The Economic Transition in Myanmar after 1988: Market Economy vs. State Control*.

◆ Kyoto Working Papers on Area Studies シリーズ

現在 No.80 (G-COE Series 78) まで発行されています。

詳しくは、下記 Web サイトをご覧ください。

http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/edit/wp/wp_list_ja.htm

◆その他の出版物

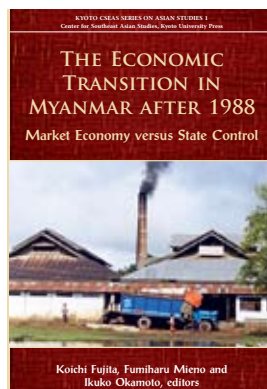
■速水洋子. 2009. 『差異とつながりの民族誌——北タイ山地カレン社会の民族とジェンダー』世界思想社。

シンガポール大学出版・京都大学学術出版会による 英文叢書新シリーズが始まる

これまで東南アジア研究所出版委員会では、ハワイ大学出版会から Monograph Series、および京都大学学術出版会と Trans Pacific Press との Kyoto Area Studies on Asia、の二つの英文叢書シリーズを刊行してきた。このたびこれに加え、シンガポール大学出版と新たなアジア研究の叢書シリーズ (Kyoto CSEAS Series on Asian Studies) を刊行することとなった。第1号は藤田幸一・三重野文晴・岡本郁子編著による論集 *The Economic Transition in Myanmar after 1988: Market Economy vs. State Control* である。第2号として水野広祐・パーサク・ポーンパイット編著による *Populism in Asia* を現在出版準備中である。欧米中心の英文出版に対して、質・量ともにレベルアップしているアジアからのアジア研究の成果を発信していくニーズは高まっている。今回

の新シリーズにより、国内外の優れた研究成果を発信するための道筋がさらに広がっていくことを願う。

(文責：速水 洋子)



購入に関する問い合わせは
京都大学学術出版会
電話：075-761-6182
Fax: 075-761-6190
sales@kyoto-up.or.jp まで

図書室ニュース

◆蘭印期の新聞を拡充しました。

・Soerabaiasch Handelsblad (セラバヤ新聞) を、これまで所蔵していた、1866-1905 年分に加え、1906-10 年分のマイクロフィッシュを新規購入しました。

・Bataviaasch Nieuwsblad (バタヴィア新聞) も、これまで所蔵していた 1886-1900 年分に加え、1920-24 年分のマイクロフィッシュを新規購入しました。

◆ Asian Economic History, ser. 2, Economic Development, 1950-1980, pt. 4 (1963-66) を購入しました。東アジア・東南アジア諸国の経済発展に焦点をあてて収集された、公文書文書のマイクロフィルム・コレクションの一部です。シリーズ1の *The Opium Trade and the United Nations Commission on Narcotic Drugs*,

1945-48 も所蔵しています。

◆ 2007 年度のベトナム地方統計をはじめ、ベトナムの新刊書を購入しました。整理にお時間をいただきますので、ご利用の際はあらかじめ京都大学蔵書検索システム KULINE (<https://op.kulib.kyoto-u.ac.jp/>) で利用の可否をご確認の上、ご来室下さい。

現在耐震工事にともない、図書室カウンター業務は東棟 107 号室にて行っております。一部利用できない資料もありますので、遠方よりご来室の際はあらかじめ電話 (tel: 075-753-7306) にてご確認ください。よろしくお願ひします。
(文責:北村由美)

来訪者

2009 年 2 月 6 日 Andreas Neef (ホッヘンハイム大学主任研究員) ▼ 2 月 18 日 Sutthiluck Sangamangkang (大阪タイ領事館副総領事) 他 1 名 ▼ 2 月 23 日 Ngheim Vu Khai (ベトナム科学技術委員会副委員長) 他 2 名



◀ 葬式本

日タイ拠点事業などの東南アジア研究所の有力な研究協力者であった、タマサート大学経済学部のソンブーン・シリプラチャイ (Somboon Siriprachai) 先生は、2008 年 12 月 20 ~ 21 日に東南アジア研究所で開催された国際ワークショップに参加され、タイ経済史の論文を発表されました。しかし、同月 25 日早朝、ソンブーン先生がタイに帰国するために関西空港に向かわれる途中容態

ソンブーン・シリプラチャイ先生 逝去

が急変し、大阪市内で亡くなられました。死因は、虚血性心疾患でした。東南アジア研究所は、ソンブーン先生の奥様や、タマサート大学経済学部の方々、さらに東南ア研バンコク連絡事務所と緊密な連絡をとり、ご遺体をタイへ搬送することとし、大阪タイ領事館など多くの方々の尽力の結果、年末も押し迫った 12 月 30 日、無事にバンコクに搬送しました。葬儀は、バンコクの寺院で 1 月 5 日 ~ 8 日に執り行われ、8 日に荼毘に付されました。東南アジア研究所からは、水野所長、速水副所長、小林バンコク連絡事務所駐在員らが参列

し、謹んでお悔やみを申し上げます。8 日の火葬に際しては、ソンブーン先生の友人たちが作った故人の葬式本が配布され、タイの経済学界の方々やご親族が多数参加されて、故人を偲びました。

2009 年 5 月 1 日発行

発行 〒 606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

Tel. 075-753-7344

Fax. 075-753-7356

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

編集 岡本正明

編集補佐 小林純子・設楽成実